

# 科学技術の潮流

JST研究開発戦略センター

338

## 関連論文が急増

論文データベースの分析によれば、AI（人工知能）の開発と他分野研究への活用を含むAI関連論文は、2015年には世界で3万報弱だったが、25年には50万報近くと16倍に急増した。本格的なAI時代を迎える中、AI技術そのものの研究者だけでなく、AIを使いこなす研究者層をどれだけ厚くできるかが、人間の問いとAIによる高速処理・高度分析を融合させ

たAI時代の研究力のカギとなる。

文数は、15年には8000報に満たなかったが、25年には21万報に増えた。AIを研究に増えた。AIを研究に増え、その分野の研究者取り入れる動きが各分野で急速に広がっている。工学をはじめ、

## 日本は低水準

AI関連論文から国・地域ごとの特徴も見てくる。欧米や豪州では人文社会系の論文も多く、AIの応用に加え、社会や倫理への

重要性も高まっている。一方、日本を含む東アジアでは、材料科学や化学などでAI活用が進む。AI関連論文の総数では中国がけん引しているが、全論文に占めるAI関連論文の割合

はインドが突出して多。省は26年3月に策定した「AI for Science」の推進に向けた基本的な戦略方針において、AI関連人材の裾野拡大と高度化を推進する方針を掲げた。

## AI for Scienceの展望

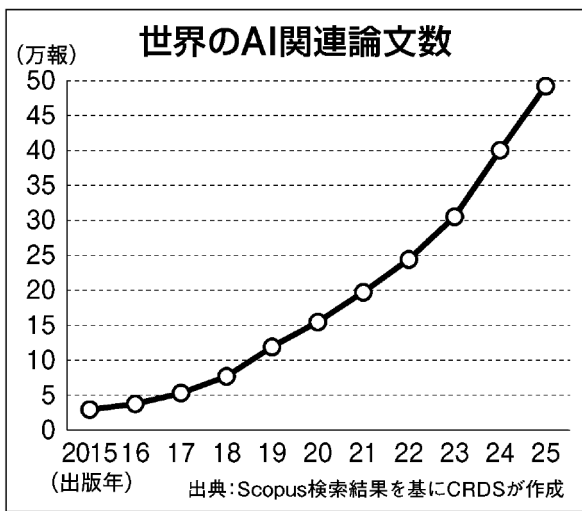
# 「使いこなす」研究者カギ

AI関連論文のうち、コンピュター科学以外、すなわちAIを活用する分野における論



科学技術振興機構(JST)研究開発戦略センター 主任専門員(エビデンス分析グループ) 野澤 龍介

東京大学工学部卒。医療機器メーカーにおいて技術開発に従事。18年から現職。論文・特許などの定量分析を担当。



AIは、研究者の分析や発見の力を拡張する点で、かつての顕微鏡やスーパーコンピュターと同様に重要なツールと位置付けられる。文献調査や翻訳・校正など論文執筆の効率化から、自律的実験や大量データからの解の探索・現象の予測といった高度利用まで、AIを使いこなす研究者層の厚みが問われる時代になっている。

(金曜日掲載)